

宮下さんと操さんの思い出

石 井 素 介（文学部）

あれは、お亡くなりになるほんの２カ月ほど前のことであった。ある夕方、大学院の前でばったり出会うと、いつもの伝で、一寸その辺でということになり、天麩羅屋の２階でしばらく四方山話をしたのが、宮下さんとの最後の会話であった。「ビールだと脈が途切れることがあるが、水割なら大丈夫なんだ」、などと言いながら、ウィーンやボンでの思い出の数々を、いかにも楽しそうに話ってくれたあの童顔が今でも眼に浮かぶ。考えてみると、同じ明大にいなから、ここ数年はゆっくりと話す機会もあまりなかった様な気がする。宮下さんが生涯の仕事とされていた資源政策論、ことに若い頃心血を注いで取組んでおられた水没補償問題など、もっとじっくりと話を聞いておけばよかったと悔やまれる。また、戦時中の中国大陆での体験談や戦後の北海道での農地改革行政の苦労話なども、ついつい伺う機会を逸してしまった。

私と宮下さんとの因縁は、お互いにまだ若かった昭和20年代に始まる。当時、経済安定本部に属していた資源調査会では、重点プロジェクトの一つとして北海道総合開発に関連した基礎調査を取上げていたが、宮下さんは専門委員として最初からこのプロジェクトに参画され、われわれ事務局員にとってのリーダー格であった。北海道では、宮下さんと同窓の北大農業経済学科出身のベテラン調査マンの面々が、石狩・十勝・根釧等諸地域の農村調査を分担していた。われわれかけ出しの事務局員は、昭和25・26・27の3年間、毎夏の1カ月以上北海道に出張しては、このベテラン・グループのお供で調査に同行させて貰い、おかげで農村での徹底的な聴取り調査のやり方を、そのイロハから教わることができたのだが、それもすべて宮下さんの周到な配慮によるものであった。これらの調査のもう一人のリーダー役を勤めておられたのが「操さん」こと故渡辺操明大教授であった。宮下さんと操さんとは道産子同士で、親の代からの知己であったらしい。ことに宮下さんが東京の事務局に勤務されるように

なってからは、事ある毎にこのお二人にあちこち引き回され、鍛えられたものである。その様な積重ねが私の人間形成にどんなに大きな影響を与えたか、一言ではいえない位である。それはひとつには、昭和20年代という、「もの」の面ではまだ決して豊かではなかったとしても、人間同士の豊かな「こころ」の結びつきが今よりずっと出来やすかった夢多き時代であったことが幸いしたとも言えるであろう。しかし、今から思い返してみると、またとない良き兄貴分に恵まれ、共に若い日を送ることができたという点だけから見ても、それは私にとってまことに幸せな日々であったと言えることができる。

ところで、宮下さんと操さんという、この二人には多くの共通点があった。堂々たる体軀の偉丈夫で、見るからに豪放磊落なタイプでありながら、実は涙もろいお人良しの一面をもち、先の先まで細かく気を配って骨折を惜しまぬ、とことんの世話好きというところは、二人ともお亡くなりになるまで変らなかった様である。実を言うと私自身、操さんの世話で、昭和31年から明大に勤務することになったのだが、宮下さんを明大に招くきっかけを作ったのが操さんであったのは言うまでもない。それだけに、宮下さんが明大に來られた翌々年の昭和45年、いささか早過ぎた操さんの逝去の後しばらくは、いつまでも宮下さんのうしろ姿に何となく一抹の寂しさが漂っている様に思われてならなかった。その後の宮下さんは、もっぱら海外への調査旅行に生き甲斐を見いだしておられた様である。その中でも、とりわけドイツ語圏の国々がお気に入りだった様で、その話はさんざん聞かされたものである。また、発展途上国からの留学生のために、大学院のゼミのテキストを1年間英語で説明してやったという話は如何にも宮下さんらしいと感心した。

宮下さんが卒然とあの世へ逝ってしまってから、早くも1年が過ぎ去った。今頃はきっと、蓮の葉の上あたりで操さんと一杯やりながら、「おい、特!」、「何だ、操」とか何とか賑やかにやり合っているのではなからうか。

(1986.1.4)